

手塚富雄著作集

中央公論社

手塚富雄著作集 第四卷

定価四八〇〇円

昭和五十六年六月 十日印刷

昭和五十六年六月 二十日発行

著者 手塚富雄

発行者 高梨茂

印刷者 青木勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八―七

振替東京二一三四

©一九八一 検印廃止

手塚富雄著作集

第四卷

ゲオルゲとリルケの研究 下

目次

第六章 苦悩の底における詩業

A 『心の四季』におけるゲオルゲ

『心の四季』の性格「なんじ」の問題 ゲオルゲの姿態の端正と
芸術意志 東洋詩と比較して

四 三

B リルケの『新詩集』と『マルテの手記』の時代

『ロダン論』の骨子・転換期における造形美術 孤独とモドゥレ
『新詩集』の諸相 『新詩集』における空疎感と詩人の芸術意志
『新詩集』の各作品 リルケとロダンの異同 リルケにおける生
の図式 『マルテの手記』の主性格 愛の教義と芸術行為との類
似 ボードレーとフロベールにたいする見方

三

第七章 究極の拠点

A ゲオルゲ——天使の訪れからマキシミンへ

『生の絨氈』の「序曲」 天使のたより 「聖なる訪れ」の女神と
天使 芸術意志と「美しい生」への意志 「序曲」の諸詩にあら
われた精神態度 死の問題 「生の絨氈」篇の諸詩 「夢と死の
歌」における生と精神の夢幻化 『第七輪』の世界 「思い出の
書」の「序言」 「マキシミン」詩篇ならびにその「神」 仲介者
としての詩人 ゲオルゲの志向の二面・宗教性と人間主義

八 八

B リルケ——内面化の世界をめぐって

二 三

第八章 愛の問題

リルケにおける生のリズムとその振幅 内面化の深化の過程における諸詩・「スペイン三部曲」と「冬の詩章」「転換」その他
「心の山の頂きにさらされて」『ドゥイノの悲歌』と『オルフォイスによせるソネット』における全一的世界の実現の努力 全一的世界の追求の動機 空間表象としての全一的世界 全一的世界の機能的執行者・天使 全一的世界の追求における詩人の態度
『オルフォイスによせるソネット』リルケの「歌」の様式 後期の一詩

A リルケにおける愛

愛と不安 性の威力 「愛することは孤独であること」リルケの待望する愛の至境とその性格 ヘルダーリンとゲーテとの対比において「物」への愛 詩人への委託の根柢 心情の力の高唱
「家神的」ということの矛盾とリルケの愛の貧しさ 芸術的任務と人間的任務 リルケの孤独における共同 晩年の詩におけるリルケ 実在の容認への傾斜をめぐって「見張り」の意志

B ゲオルゲにおける愛と理想

ゲオルゲの愛のエロスの性格 アガペーとエロス 詩人とマキシミンとの関係における情熱性 詩人とマキシミンとの関係の秘儀化 情熱性から「よりゆたかな展開」へ 詩人をめぐる者たちへの呼びかけ 芸術と生 ゲオルゲの愛における差別観 ゲオルゲ

結

び

の愛の要求性 現在の永遠化 時代への批判と警告 ゲオルゲの
愛の現実性と理想性 晩年のゲオルゲの詩における悲劇性

三五

注

三七

略年譜

三七

あとがき

三七

主要参考文献

索引

三七

ゲオルゲとリルケの研究 下

第六章 苦悩の底における詩業

いままでわれわれは、ゲオルゲとリルケが、それぞれの境遇と特質をにないながら、近代詩人として世界的精神空間に参加するまでの経過を見てきた。あらゆる相違にかかわらず二人は同じ時代の子である。それにつづいて、われわれは、この共通の精神空間において、二人の詩業がそれぞれいかなる帰結に達したかを辿らなければならない。これは、くわしく扱えば、その一部分だけでも龐大な論述を必要とするが、われわれは大局的に最も重大な事項として、二人における究極的探求と二人の愛の問題の二点を手がかりとして考えていきたい。それによって、近代詩人としての二人の面目とその上での異同は最もきわだって現われ、彼らの芸術の本質の把握にせまりうると思うからである。

まず両詩人の究極的探求の跡を辿ることになるが、その前につきのことに意をとめる必要を感じる。ここでいう究極的探求とは、所与のものとして拠るべき究極の根柢が欠如している精神状況において、それぞれがみずからの最善をつくして、その根柢を獲得しようとする努力をさすのである。その際、そのことに最善をつくしうるかどうかは、彼らがいかにその欠如を痛感し、それを受苦するかに、深くかかわっている。欠如を自覚せぬもの

が、それを埋めるべく努力するはずはなく、深く底に沈まなければ、真の根柢に達することは不可能だからである。それで、今までも部分的には触れてきたことであるが、詩業における彼らの受苦のさまをその最強度のありかたにおいてたずね、その上で彼らの究極的探求の帰着点を見ることにしたい。

A 『心の四季』におけるゲオルゲ

『心の四季』の性格

まずゲオルゲを見ると、詩人の自我の美的絶対専制は崩壊し、自己のありかたの中心となるべき価値は見出すことができず、全面的な意義喪失の淵に臨むに至ったことは、前章で述べたとおりである。しかるに、二十九歳にして『心の四季』(*Das Jahr der Seele*, 1897)として公刊された詩集は、さらにその状況を極限にまで突きつめた詩的発語として、ゲオルゲの制作史における精神的浮沈の最低点を示すものである。しかし、およそそういう最低点において、ひとの真の面目はかえって端的に現われるものである。そしてこの詩集が、芸術的にはゲオルゲの著作中最も魅力あるものであり、多くの人の心に訴えることになったのは、表現の世界における不思議な消息として興味をひかれるのである。

一般にとってなじみの深い作のなかから、まず一つを採って、全貌の一端をうかがおう。

Nun säume nicht die gaben zu erhaschen

Des scheidenden gepränges vor der wende,

Die grauen wolken sammeln sich behende,

Die nebel können bald uns überraschen.

Ein schwaches flöten von zerpfücktem aste
Verkündet dir dass letzte güte weise
Das land (eh es im nahen sturm vereise)
Noch hülle mit beglänzendem damaste.

Die wespen mit den goldengrünen schuppen
Sind von verschlossnen kelchen fortgefogen,
Wir fahren mit dem kahn in weitem bogen
Um bronzebraunen laubes inselgruppen.

わかれゆく季節のかずかずの華麗な贈りものを
うけとることをためらってはいけない。
くらい雲はみるまにむらがり

霧はやがてわれらの視界をつつんでしまおうだろう。

葉をむしって枝を鳴らす

風のひくい笛の音は君に告げる、最後の恩寵は

国原を（それがまぢかい嵐で凍てつく前に）
真白い綸子でつつむだらうことを。

蜂たちはそのうろこを金いろの緑にかがやかして
すがれた花萼から飛び去っていった。

わたしたちは水面に大きく弧をえがいて

錆いろの黄葉の島々のまわりを舟をすすめる。

迫りくる氷雪を前にして、季節の最後の栄光をつかみとって享受しようとする言葉のうらには、もがきともい
うべき心の姿がある。晩秋の日のかがやきと物たちの多彩な色には、すでに濃い影がさしている。第三節の、飛
び去る蜂をいう言葉は、おさえがたい悲愁をひそめて高まり、小舟に乗って落葉の島の群をめぐる「わたした
ち」の描く弧線は、あてどのない人のたゆたたいを象徴して、消えない余韻をつたえている。

『心の四季』という表題が語るとおり、外なる事象の季節上の移り変りは、そのまま詩人の内面の景觀であって、
単に前者の描写や再現を意図したものでないことはいうまでもない。この詩集にたいする論評としては、グンド
ルフが、やや煩瑣であるが周到をきわめ、ホーフマンスタールの『詩についての会話』(Das Gespräch über Gedicht,
1903)は、芸術的に卓抜である。グンドルフのそれは、深い洞察にみちたものであるが、この詩集における
自然という要素に一つの重要なアクセントがあり、自然と魂と運命の一致したものがこれらの作品であると言っ
ているのは、自然という用語に概念の不確かさを感じさすところがある。なるほど、前掲の詩によってもわかる
ように、季節的事象が多く歌われているのであるから、自然という語が評者のうちに呼び出されるのは、ありう

ることであり、ゲオルゲが前詩集で歴史をさぐったのに対し、ここでは自然を相手にしたというのも、通りのいい論じかたである。しかし、自然という語は多義であるなかに、とくにしばしば、統一性をもった活力、生産力と解される傾きをもつ。もしグンドルフが、自然という語によって、無意識のうちにも *Natura naturans* (能産的自然) の意味を混入する余地を残しておくなら、それはやはり事の真実をつかむ上を来たすであろう。そういう意味での自然は、この詩集では問題になっていない。ここに現わされているのは、もっぱら風景であり、中でもゲオルゲの境遇や遊歴に対応して、ヨーロッパ的な都市の公園風景が多くを占めている。それについて、自然という語を使うのは、かえって事をあいまいにし、むしろホーフマンスタールのように単純に「外界」というほうがまさっている。彼は説く、「詩人は象徴以外の何物をも見ることはできない。……われわれが如実にあるがままのわれわれであろうとすれば、われわれはわれわれの内部にひそんでいることはできない。すなわちわれわれは外にいるべきだ。われわれはわれわれのものを所有していない。実体のない虹のように、われわれの魂は外界の持続的な転変にかかわっているのである」と。ホーフマンスタールが自身の詩のモチーフを告白しているような説きかたで、そこでは魂そのものに恒常的な実体はないということに主眼点がおかれている。それは一人の詩人の口をかりた一世代の内面の吐露で、むしろゲオルゲのこの詩集にたいする評価として、的をはずれているのではない。論者によっては、当時のゲオルゲの詩作にたいするホーフマンスタールの影響を指摘するほどである。われわれは前出のゲオルゲの詩にもどって、その特性を次のように言いたい。無心の嬰兒や幼児は、その無心のなかで、かれらの目をひいた外界の事物やその運動・性状などを、ただ「それがある」と指さし、言うだけであろう。それが彼らの無心そのものの現われなのである。至福な愛人どうしは、彼らの至福についてはなんのいべき言葉もなく、ただ眼前の事象を指さし命名してうなずきあうだけだろう。それによって現わされるのは、彼らの心の至福ということだけである。それと同種のことだが、ゲオルゲの『心の四季』の諸詩において

行なわれているのである。ただそこでは、詩人の心の姿は無心でも至福でもなく、憂いであり悲愁であり無方途なのである。そういう心によって最も親近性をもって捉えられたのが、外の風景の季節的転変のすがたである。つまり内と外とが対応し、外は内の象徴となっている。主なるものは、詩人の心であって、外なる事象ではない。その心が方途のない憂いや悲愁のなかにあるかぎりにおいては、「実体なく」「外界の転変にかかわっている」と言ってもよく、またその心が方途のないありかたに貫かれていればこそ、外なる転変におのれを委ねうるのである。その委ねかたは、詩集の中の諸篇が示すように、その時々々の「いま」と「ここ」に全的におのれを放って、次の瞬間のために保留するところがない。こうして風景は心と一体になって、定めのない転変の中における刻々の如実の相を示すのである。これは外界にたいする内面からの意味づけということとは別である。内面に対応する外界の姿が、心のなかに飛び込んできて、その偶然性が心のなかで動かぬ真実性を獲得するのである。しかもその心自体が、方途のないありかたの中にたゆたっているのであるから、それと触れあう外界の姿を通じて、その時々のおのれを確認していくのである。それは、グンドルフも言っているように、外界を令活的に見る (Beseelen) ということではなく、⁽³⁾ またその力動化でもない。心と触れあうかぎりにおいて、そこに捉えられた事象は、ありのままの事象なのである。あの「わたしたちはブナの道のゆたかな日のきらめきのなかをさすらう」(Wir schreiten auf und ab im reichen flitter) で始まる有名な一詩では、むなししい心を抱いて連れ立つ男女二人の眼に、そこはかとなく巴且杏の返り花が映り、やがてベンチに無言でいこう二人の耳に、落ちて大地をたたくその果実の音がひびくのであるが、それをヨハネス・クラインのように「あだに終る出会いのさま」⁽⁴⁾ だということは、要領のいい説きかたであるにしても、詩の受け取りかたとしては、意味づけに一步踏み出しているもので、本質的には無用のことである。われわれは、その景をそのまま受け取ることによって、その心の、意味ではなく、ありかたに触れればよいのである。このように見てくると、この詩集において詩人の心に対しては、統一性をも

った能産的な自然というようなものではなく、その時々々の風景の表情であり、それが諸詩によって季節の転変において捉えられ、その転変ということが、風景と詩人の心とに共通するものであることを確認することができよう。そして、その風景と心のうち、心が主体であることは、さきほども言ったが、それはこの詩集に、秋、冬、夏の詩はあって、春が欠けていることによっても、傍証されよう。うつろな転変にただよう心にとっては、新しい生命の予感に充ちている春の風景を容れることは困難である(夏の風景は、生命の充実の高潮であるが、この詩集ではそれが、例えば噴水の頂点がまさにくずれ落ちようとする気配において捉えられているようなものが多い)。その心は、おのれと触れあいのないものには、かかわりあうことができないのである。さらに、心が主体だということは、巻中の「悲しい舞踏」(Traurige Tánze) 詩篇では、風景が歌われていても、四季の区別はなく、さらに風景を離れて心そのものが「舞踏」している詩があることを見ても知られよう。こうして、心を主体とした転変のさまが全篇をつらぬくのであるが、もしその中核を別の言葉で表現するなら、グンドルフと共に、躊躇なく、「運命」の語を選ぶことができる。詩人の心は、運命の波の起伏のままに浮き沈みしているのである。そして浮き沈みすることにあえて身をおいて退転しようとしなない点では、ニーチェの運命愛の詩的实践というべき趣が濃い。またその運命の起伏には、けっして終結がなく、永遠のくりかえしを内包していることは、心理的にニーチェの永劫回帰的世界把握と類縁をもっているといえる。ただ、このばあいの詩人ゲオルゲの心の主調は、運命愛的であっても、ニーチェのようにそのベシミスムのなかに彼一流の逆説的態度で悦楽(Lust)を誇称するのではなく、ただそのあるがままの憂いと荒涼のさまであるといふべきであろう。「夏の勝利」(Sieg des Sommers) 詩篇のなかの詩は、夏の風景と結んでいるから、晩秋の詩などちがって、右に言ったことと一見矛盾するように思われるであろうから、そのなかから一例をあげておこう。

Die reichsten schätze lernet frei verschwenden,
Wie nach den langen strahlen auf verdorrte
Gewächse sollet ihr am frohen orte
Den heissen gliedern milden regen spenden!

Gedenkt vom schönsten pflückend was hier sprosset
Wenn süß und schwül die dämmerungssterne blicken
Wenn glühn und dunkeln wechselnd euch bestricken
Dass ihr soviel verliehen ist genosset!

Und törig nennt als übel zu befahren
Dass ihr in euch schon fernie bilder küsstet
Und dass ihr niemals zu versöhnen wüsstet
Den kuss im traum empfangen und den wahren.

ゆたかな宝のかずかずを惜しみなく使いはたせ、
ながいあいだの早ひやくりが草木を喘あえがしたのちのように
よろこばしい場所できみたちは熱した手足に
柔らかな雨をそそがねばならぬ。